

1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和5年5月)

野菜振興部 調査情報部

【要約】

- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は12万4090トン、前年同月比103.7%、価格は1キログラム当たり259円、同95.0%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万7872トン、前年同月比103.3%、価格は1キログラム当たり238円、同95.6%となった。
- 7月は高原産地や東北、北海道に産地が切り替わるが、4月の低温の影響もなく平年並みの始まりと予想される。品目によっては北の主力産地の出荷が始まる前に品薄となって、価格が上昇するものもあると予想される。全体では、平年より高めの価格で推移すると予想される。

(1) 気象概況

上旬は、低気圧や前線の通過に伴い、本州付近では6日から8日頃にかけて雨が降り、大雨となった所もあったため、旬降水量は、東・西日本日本海側と西日本太平洋側でかなり多くなった。特に、東日本日本海側では旬降水量は平年比338%となり、1946年の統計開始以降、5月上旬として1位の多雨となった。また、北日本日本海側と北・東日本太平洋側で多かった。旬間日照時間は、期間の初めと終わりに高気圧に覆われ晴れたため、東日本太平洋側でかなり多く、北・東・西日本日本海側と北・西日本太平洋側で多かった。日本付近は期間の前半は平年を上回る日があったが、期間の後半に冷涼な空気に覆われ、平年を下回る日があり、旬平均気温は、西日本で低く、北・東日本では平年並みだった。

中旬は、北・東日本日本海側を中心に高気圧に覆われ晴れた日が多く、旬降水量は、北日本日本海側と北日本太平洋側でかなり少なく、東日本日本海側で少なかった。東・西日本では平年並みだった。旬間日照時間は、北・東日本日本海側で多く、北・東・西日本太平洋側と西日本日本海側では平年並みだった。気温は、期間の前半に冷涼な空気に覆われて平年を下回る日があったが、期間の後半は晴れて気温が平年を

大きく上回る日があり、旬平均気温は、北日本で高く、東・西日本太平洋側と西日本日本海側では平年並みだった。

下旬は、低気圧や前線の影響を受けにくかったため、旬降水量は、北日本日本海側と北日本太平洋側で少なかった。九州北部地方、四国地方、中国地方、近畿地方、東海地方では29日ごろに、九州南部では30日ごろに梅雨入りしたとみられる。旬間日照時間は、東・西日本日本海側と東日本太平洋側で少なく、北日本日本海側、北・西日本太平洋側では平年並みだった。29日頃は日本海側を中心に大雨となった所があり、旬降水量は、東日本日本海側でかなり多く、西日本日本海側で多かった。東・西日本太平洋側では平年並だった。気温は、全国的に期間の中頃に冷涼な空気の影響で平年を下回る日があったものの、暖かい空気に覆われやすかったため、旬平均気温は北・西日本で高かった。東日本では平年並みだった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り(図1)。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本								日本海側 太平洋側	
東日本					日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側	
西日本						日本海側 太平洋側			日本海側 太平洋側

資料: 気象庁「5月の天候」

1 平年を上回る水準			
2 平年並み			
3 平年を下回る水準			

(2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、

入荷量は12万4090トン、前年同月比103.7%、価格は1キログラム当たり259円、同95.0%となった(表1)。

表1 東京都中央卸売市場の動向(5月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	124,090	103.7	95.8	259	95.0	106.3	276	255	247
だいこん	8,233	107.9	98.9	91	78.7	97.9	109	92	73
にんじん	7,898	102.1	96.1	162	119.8	120.0	196	157	132
はくさい	6,316	106.6	96.1	85	114.9	130.5	115	75	60
キャベツ類	17,079	95.7	95.0	84	85.4	94.4	103	77	75
ほうれんそう	1,544	117.8	105.3	441	91.2	105.7	475	449	398
ねぎ	3,606	98.6	98.2	417	102.2	102.7	437	414	403
レタス類	7,182	108.8	103.0	157	93.7	98.2	168	148	155
きゅうり	8,019	105.6	97.5	237	89.4	95.6	257	235	217
なす	2,992	105.3	91.8	377	92.9	97.8	402	380	349
トマト	7,840	95.3	82.5	328	104.0	119.3	351	341	296
ピーマン	2,996	120.5	111.3	464	97.5	116.2	522	463	400
さといも	170	76.0	75.2	426	131.9	116.8	355	453	475
ばれいしょ	9,631	108.0	106.6	158	96.7	85.9	159	160	157
たまねぎ	12,151	122.5	100.2	100	39.1	91.8	102	100	98

資料: 東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1: 平年比は過去5カ年平均との比較。

注2: 豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、にんじんの価格が、関東産が増量した中旬以降に下がったものの、前年を2割弱上回り、平年を2割上回った（図2）。

葉茎菜類は、キャベツが連休以降価格を下げ、高かった前年を1割以上下回り、平年をやや下回った（図3）。

果菜類は、ピーマンの価格が、下旬に向け落

ち着きを見せ、高めに推移した前年をわずかに下回り、平年を1割以上上回った（図4）。

土物類は、たまねぎの価格が、大幅な高値で推移した前年を6割強下回り、平年をかなりの程度下回った（図5）。

なお、品目別の詳細については表2の通り。

図2 にんじんの入荷量と卸売価格の推移

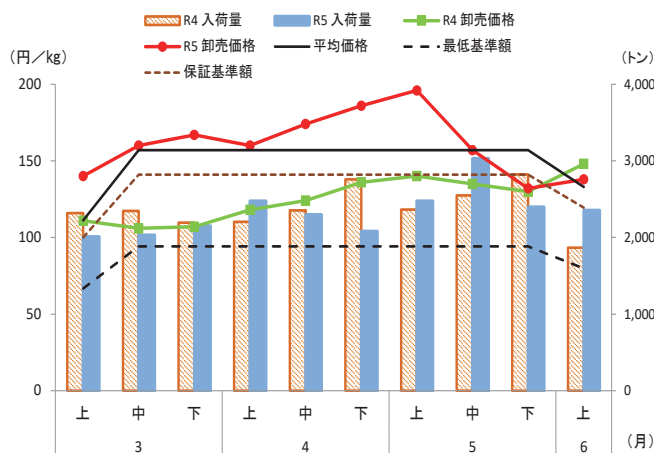


図3 キャベツの入荷量と卸売価格の推移

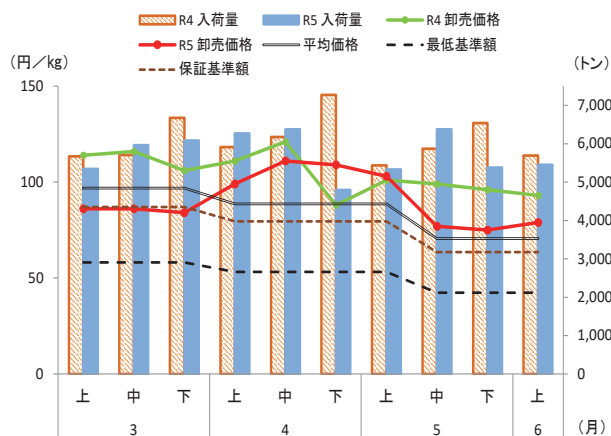


図4 ピーマンの入荷量と卸売価格の推移

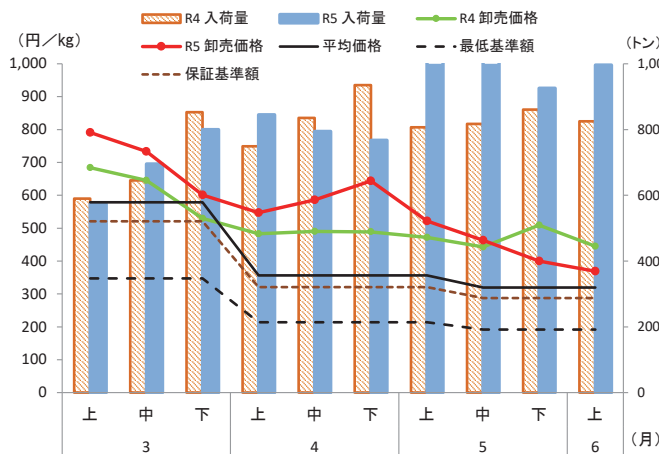
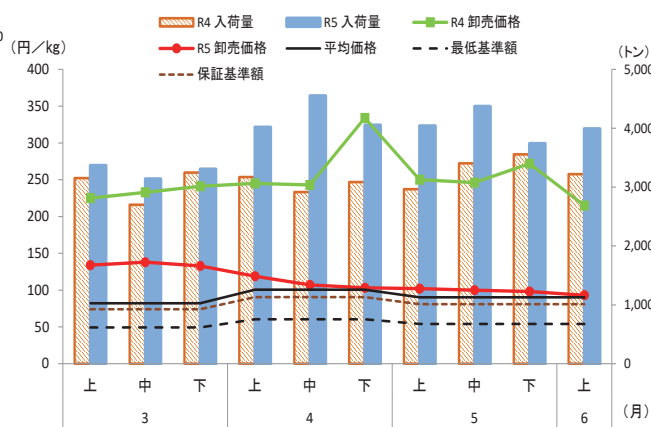


図5 たまねぎの入荷量と卸売価格の推移







資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における、過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	5月の入荷量・価格の動向
根菜類	 だいこん 千葉産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、3月以降の気温の上昇と適度な降雨により生育は前進している。後続の青森産についても肥大良く生育順調であった。総入荷量は、少なめに推移した前年をかなりの程度上回り、平年をわずかに下回った。 下旬に向け価格を下げ、高めに推移した前年を2割以上下回り、平年をわずかに下回った。	
	 にんじん 徳島産を中心に千葉産の入荷があった。徳島産の作付面積は前年並みで、乾燥の影響により遅れが散見されていたが、出荷にはほぼ影響はなく、中旬以降、減少に向かった。千葉産の作付面積は前年並みで、低温乾燥により一部遅れが散見されたが、その後の気温の上昇により、生育は前年並みからやや前進傾向となった。総入荷量は少なめに推移した前年をわずかに上回り、平年をやや下回った。 関東産が増量した中旬以降に価格を下げたものの、前年を2割弱上回り、平年を2割上回った。	
葉茎菜類	 はくさい 茨城産中心の入荷となった。作付面積は前年をやや下回り、干ばつでの遅延傾向から一転、3月下旬の気温上昇により前進傾向となった。後続の長野産も4月の気温上昇と適度な降雨により生育順調であった。総入荷量は少なかつた前年をかなりの程度上回り、平年をやや下回った。 価格は下旬に向けて下がったものの、加工向け需要が堅調なことから、高めに推移した前年を1割以上上回り、平年を3割強上回った。	
	 キャベツ類 千葉産を中心に愛知産、神奈川産、茨城産の入荷があった。千葉産の作付面積は前年並みで、3月以降の気温上昇と適度な降雨により前進しており、収穫も順調となった。愛知産の作付面積は前年並みで、生育は気温の上昇に伴い前進し、下旬には漸減した。神奈川産の作付面積は前年並みで、3月の気温の上昇に伴いかなり前進しており、中旬以降減少した。茨城産の作付面積は前年並みで、気温が高めに推移したことにより前進した。総入荷量は前年、平年ともやや下回った。 連休以降価格を下げ、高かつた前年を1割以上下回り、平年をやや下回った。	
	 ほうれんそう 茨城産、群馬産中心の入荷となった。各産地とも作付面積は前年並みで、高冷地を中心に高めの気温推移と適度な降雨により生育は前進傾向で、前年に比べて開始と増量のペースは大幅に速い。平坦地のハウス物も前進し、順調な入荷となった。総入荷量は、高冷地の前進によって中旬以降増量した影響により、少なかつた前年を2割近く上回り、平年をやや上回った。 価格は増量に伴い軟調となり、高めに推移した前年を1割近く下回り、平年をやや上回った。	
	 ねぎ 茨城産を中心に千葉産、埼玉産などの関東産中心の入荷となった。各産地とも作付面積は前年並みで、3月以降の気温上昇と適度な降雨により生育は順調で、一部前進となった。降雨により出荷ペースにややばらつきがみられるのと、一部圃場で病害が散見されている。総入荷量は前年並みであった前年をわずかに下回った。 価格は下旬に向けて徐々に落ち着いてきたものの、前年、平年ともわずかに上回った。	
	 レタス類 長野産を中心に群馬産、茨城産の入荷があった。長野産の作付面積は前年並みで、4月の気温が高く適度な降雨により生育は順調であった。群馬産の作付面積は前年をやや下回り、天候に恵まれて生育は前進した。茨城産の作付面積は前年をやや下回り、遅延気味であった生育は、気温が高めに推移したことから一転して前進し、中旬以降漸減した。総入荷量は少なめに推移した前年をかなりの程度上回り、平年をやや上回った。 価格は連休後にやや落ち着きを見せ、やや高めに推移した前年をかなりの程度下回り、平年をわずかに下回った。	
果菜類	 きゅうり 埼玉産、群馬産を中心に宮崎産、千葉産などの入荷があった。埼玉産の作付面積は前年並みで、好天に恵まれ生育は良好であった。群馬産の作付面積は前年並みで、生育は順調だが、夜温が高いことにより一部病害が散見された。宮崎産の作付面積は前年並みで、低温の影響により一部草勢の低下がみられたものの、生育はおおむね順調であった。千葉産の作付面積は前年並みで、生育は順調であった。総入荷量は少なめに推移した前年をやや上回り、平年をわずかに下回った。 価格はやや高めに推移した前年を1割強下回り、平年をやや下回った。	
	 なす 高知産を中心に群馬産など関東産の出荷が開始した。各産地とも作付面積は前年並みで、高知産はやや成り疲れが散見されたが、天候に恵まれ樹勢は回復し、着果数も増加した。関東産についても高めの気温推移から生育は前進した。一部強過ぎる日差しによる日焼け果が散見されるが、大きな影響はない。総入荷量は少なめに推移した前年をやや上回り、平年をかなりの程度下回った。 価格は潤沢な入荷と関東産の増量ペースも早く、やや高めに推移した前年をかなりの程度下回り、平年をわずかに下回った。	
	 トマト 熊本産、栃木産を中心に愛知産などの入荷があった。熊本産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調も、黄化葉巻病、黄化病の発生が散見された。栃木産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調も、コナジラミ類の発生が前年より多い。また5月に入ってからの曇雨天により、うどん粉病の発生もやや多い。愛知産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調も、灰色かび病、うどん粉病が散見され、コナジラミの発生もやや多い。総入荷量は少なめに推移した前年をやや下回り、平年を2割近く下回った。 価格は下旬に軟調な展開となったものの、高めに推移した前年をやや上回り、平年を2割近く上回った。	

	ピーマン 	茨城産を中心に宮崎産などの入荷があった。茨城産の作付面積は前年並みで、春作の最盛期となっているが、一部病害の発生が散見された。宮崎産の作付面積は前年並みで、生育は順調だった。総入荷量は少なかった前年を2割強上回り、平年を1割以上上回った。 価格は下旬に向け落ち着きを見せ、高めに推移した前年をわずかに下回り、平年を1割以上上回った。
土物類	さといも 	鹿児島産、千葉産を中心とした入荷となった。各産地とも作付面積は前年並みで、鹿児島産は雨の影響が大きかった前年を大幅に上回り、生育は順調だった。千葉産の残量はあまり多くなく品質の低下が顕著であった。中国産の輸入はほとんど入荷がなかった。総入荷量は前年、平年とも2割以上下回った。 価格は安めに推移した前年を3割以上上回り、平年を1割以上上回った。
	ばれいしょ 	長崎産を中心に鹿児島産の入荷があった。長崎産の作付面積は前年並みで、植え付け直後は低温だったが、その後好天に恵まれ回復し、やや前進傾向であった。鹿児島産の作付面積は前年並みで、1月の寒波の影響により、その後の乾燥で肥大が遅れ、小玉傾向であった。全体にやや遅延傾向にあったものが、回復傾向となった。総入荷量はやや少なかった前年をかなりの程度上回り、平年をかなりの程度上回った。 価格は4月の高値の反動もあり、前年をやや下回り、平年を1割以上下回った。
	たまねぎ 	佐賀産を中心に北海道産、兵庫産の入荷があった。佐賀産の作付面積は前年並みで、やや遅れていた作柄は好天に恵まれ前年並みに回復した。玉のそろいも良く順調だが、べと病が一部散見された。北海道産の作付面積は前年並みで、収穫は終了し貯蔵からの出荷となった。夏場の天候の影響を受けた地域はあるものの、全体としては作柄良好で肥大も良好であった。兵庫産の作付面積は前年並みで、適度な降雨と気温の上昇により前進傾向となった。一部病害が散見されるが影響はない。中国産の輸入は前年の5割以下となっている。総入荷量は少なかった前年を2割以上上回り、平年並みとなった。 価格は大幅に高めに推移した前年を6割強下回り、平年をかなりの程度下回った。

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万7872トン、前年同月比103.3%、

価格は1キログラム当たり238円、同95.6%となった(表3)。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(5月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	37,872	103.3	97.9	238	95.6	109.2	253	234	227
だいこん	2,453	110.6	98.9	83	78.3	101.8	94	81	77
にんじん	2,708	107.4	103.5	138	121.1	127.6	174	128	102
はくさい	2,824	101.0	102.8	107	117.6	136.5	159	94	75
キャベツ類	5,062	98.8	99.8	76	77.6	88.8	88	69	73
ほうれんそう	511	111.7	97.1	558	97.0	109.4	608	551	518
ねぎ	627	109.7	103.5	494	101.2	111.2	515	494	469
レタス類	1,592	103.8	91.5	164	93.7	99.6	158	162	174
きゅうり	1,943	115.0	118.7	231	90.2	97.0	257	233	206
なす	1,185	120.8	118.1	362	97.6	102.8	375	375	336
トマト	2,112	93.2	91.1	319	103.2	116.4	330	331	300
ピーマン	650	122.5	99.8	432	103.3	124.9	476	438	379
さといも	24	103.2	61.0	542	107.3	119.2	413	660	697
ばれいしょ	3,401	92.0	97.0	159	111.2	91.3	158	166	149
たまねぎ	4,923	117.8	105.2	87	35.7	82.3	91	84	87

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向（大阪市中央卸売市場）

類別	品目	5月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	<p>長崎産、香川産、和歌山産、鹿児島産が主体となり、宮崎産などの入荷もあった。各産地とも上旬は朝晩の気温が低かったことから生育が進まず、入荷量が伸び悩み、中旬にかけて回復傾向と見受けられたものの、月の後半は降雨の影響により収穫作業ができない日も多く、下旬は減少した。月間全体では前年を1割以上上回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>中旬以降は降雨の影響により品質低下が多く見られたため、入荷量が少ない中でも単価は伸び悩み、旬を追うごとに下落傾向となった。月間では前年を大幅に下回り、平年をわずかに上回った。</p>
	にんじん 	<p>長崎産と徳島産が主体となり、兵庫産の入荷もあった。長崎産の上中旬は順調であったが、降雨の影響などにより下旬に減少した。徳島産は終盤に向かい旬を追うごとに減少したが、全旬とも入荷量自体は多く、月間では前年を大きく上回った。月間全体では前年をかなりの程度上回り、平年をやや上回った。</p> <p>価格は旬を追うごとに下落傾向ではあったが、安定した入荷を続けたことにより量販店での特売などが組まれることが多く、堅調な推移となった。月間では前年、平年とも大幅に上回った。</p>
葉茎菜類	はくさい 	<p>茨城産を中心とし、中旬からは後続の長野産がスタートして主体となった。春はくさいは各産地とも前月までの前進出荷傾向に加え、作付けの減少により産地残量が少なく、切り上がりが早く、上中旬の入荷量は全体でも伸び悩んだ。長野産は生育順調で、降雨の影響と気温上昇により前進した。全体では全旬とも安定した入荷で、月間では前年、平年ともわずかに上回った。</p> <p>価格は、長野産の前進出荷の影響により中旬に暴落し、旬を追うごとに下落となったが、前年が極端な安値だったこともあり、月間では前年、平年とも大幅に上回った。</p>
	キャベツ類 	<p>春系キャベツは前月までの前進出荷傾向により切り上がりが早く、各産地とも上旬でほぼ終盤を迎え、中下旬はわずかな入荷量となった。初夏系の寒玉キャベツは、愛知産を中心に福岡産や茨城産などが主体となった。各産地とも中旬以降の降雨の影響により大玉傾向となり入荷増となった。キャベツ全体での入荷量は前年をわずかに下回り、平年並みとなった。</p> <p>春系は作の終盤と降雨の影響により、品質低下品が見られたため価格は伸びず、初夏系は大玉傾向により中旬以降に価格が下落した。全体でも月間では前年を大幅に下回り、平年をかなり大きく下回った。</p>
	ほうれんそう 	<p>この時期の主力である岐阜産を中心に、福岡産などの入荷があった。岐阜産は朝晩の気温が低く生育が進まず、産地出荷量が伸び悩んだ。福岡産は春物の前進傾向に加えて朝晩の気温の低さにより出荷量が少なく、旬を追うごとに減少し、月間でも前年を下回った。月間全体では前年をかなり大きく上回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は、岐阜産の出荷が進むにつれ、旬を追うごとに下落傾向の中、入荷量が安定しないことから積極的な販売もできず、厳しい状況が続いた。月間では前年をやや下回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
	ねぎ（白ねぎ） 	<p>群馬産の残量と後続の茨城産が主体となる入荷であった。茨城産は、上旬は出遅れて前年の3分の1程度にとどまったが、中旬以降は順調な入荷を続け、月間では前年をかなり上回った。群馬産は切り上がりが早く、月間では前年を大きく下回った。月間全体では前年をわずかに上回った。</p> <p>価格は、大きな増減はなく安定して推移し、月間では前年をやや下回った。</p>
	ねぎ（青ねぎ） 	<p>徳島産を中心として、高知産や近隣の大阪産、奈良産などの入荷があった。細ねぎは高知産と静岡産が主体となる入荷であった。徳島産は微減傾向ながらも前年を上回った。月間全体では前年並みとなった。</p> <p>朝晩の気温が低いことと中旬以降の降雨の影響により、下位等級品の比率が高まったことから、価格は旬を追うごとに下落したものの、引き合いがあったため、前年を上回った。</p>
	レタス類 	<p>夏産地の長野産が主体となり、兵庫産の残量入荷もあった。九州四国の産地は切り上がった。兵庫産は上旬までは順調であったが、中旬以降は終盤となり減少、長野産は旬を追うごとに増加となるも月の後半は干ばつの影響により伸び悩んだ。サニーレタスは福岡産が終盤となって中旬で切り上がり、中旬以降は後続の長野産が主体となる入荷であった。福岡産は産地残量が多く、終盤まで順調な入荷を続け、長野産は生育良好で月の後半に増加した。リーフレタスは上旬が福岡産の残量入荷と、中旬以降は後続の長野産が主体となる入荷で、サニーレタス同様に福岡産は残量が多く、長野産は生育良好で月間全体でも前年をやや上回った。レタス類全体では月間で前年をやや上回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>玉レタスの価格は安定推移したが、降雨の影響により品質低下品が見られ、産地の切り替わり時期に伸び悩んだ。サニーレタスとリーフレタスは共に売れ行きが悪く、価格は伸び悩んだ。レタス類全体では前年をかなりの程度下回り、平年をわずかに下回った。</p>

果菜類	きゅうり 	<p>宮崎産が中心となり、高知産や徳島産などの入荷があった。下旬には後続の主力産地である福島産の入荷も始まった。上旬は順調かと思われたが、朝晩の気温が低いため生育が進まず、前年よりは多いながらも中旬にかけては伸び悩んだ。福島産はスタートするも出遅れ気味で少なかったため、全体での入荷量が下旬に減少した。月間全体では前年をかなり大きく上回り、平年を大幅に上回った。</p> <p>入荷量が安定しないことから量販店での特売などが組みづらく、販売環境は厳しい状況が続いた。価格は旬を追うごとに下落し、月間では前年をかなりの程度下回り、平年をやや下回った。</p>
	なす 	<p>千両系は高知産と大阪産が中心となり、長茄子は福岡産と熊本産が主体となる入荷であった。各産地とも上旬は朝晩の気温が低いことから生育が進まず、上中旬の入荷量は伸び悩んだが、前年と比べると上中旬とも大幅に多かった。中旬以降は回復し、下旬には増加した。月間全体でも前年、平年とも大幅に上回った。</p> <p>量販店の売価設定が安かったため、価格は入荷増に伴って下旬に下落して安値推移となった。月間では前年をわずかに下回り、平年をわずかに上回った。</p>
	トマト 	<p>愛知産と熊本産が主体となり、福岡産の入荷もあった。下旬には後続の石川産もスタートした。各産地とも作の終盤でありながら、特に熊本産の産地残量が多く、上中旬は前年を大きく上回る入荷量であった。福岡産は中旬以降に減少、愛知産は下旬に減少し、全体でも下旬は前年をかなり下回った。月間全体では前年、平年ともかなりの程度下回った。</p> <p>トマト自体の引き合いは強く、上中旬は安定した高値となったが、下旬は作の終盤となり品質低下も多く、下落した。月間では前年をやや上回り、平年を大幅に上回った。</p>
	ピーマン 	<p>宮崎産と高知産が主体となる入荷であった。各産地とも前月までの出荷が少なかったものが5月に入って回復し、出荷量を伸ばした。上旬に朝晩の気温が低かったことにより中旬に少し減少したが、下旬には再び増加し、月間では前年を大幅に上回り、平年並みとなった。</p> <p>安定して入荷量が多かったため、特売などの需要にも対応でき、価格も旬を追うごとに下落する中でも堅調な推移となった。月間では前年をやや上回り、平年を大幅に上回った。</p>
土物類	さといも 	<p>愛媛産と鹿児島産が主体となる入荷であった。愛媛産は生育良好で順調な入荷となったが、作としては終盤で、中旬以降に減少した。鹿児島の離島ものが連休明けからスタートしたが、前月までは愛媛産の安値での引き合いがあったものが、鹿児島産の単価が高かったことから量販店、加工筋共に引き合いが弱まったため、積極的な集荷ができず入荷量は伸び悩んだ。月間では前年をやや上回り、平年を大幅に下回った。</p> <p>後続の鹿児島の離島ものの単価高の影響により、中旬以降高騰し、月間全体でも前年をかなりの程度上回り、平年を大幅に上回った。</p>
	ばれいしょ 	<p>丸芋は長崎産と鹿児島産が主体となる入荷であった。鹿児島産は終盤で旬を追うごとに減少する中でも、大玉中心で入荷量は多く、月間では前年の3倍以上となった。長崎産も大玉傾向で順調な入荷を続け、月間全体でも前年を上回った。メークインも長崎産と鹿児島産が主体となる入荷であった。鹿児島産は終盤で、前進気味に中旬に切り上がった。月間の入荷量は前年を大きく下回った。長崎産はやや出遅れて上旬が少なく、中旬以降に増加したが前年には及ばず、月間では前年をかなり下回った。全体でも前年を大幅に下回った。ばれいしょ全体では、前年をかなりの程度下回り、平年をやや下回った。</p> <p>丸芋の価格は全旬を通して安定推移であった。メークインは作付けが減っており、不足感から高値推移し、中旬に入荷増となったが価格はそれほど下がらなかった。販売環境が厳しかったため下旬には下落したが、月間全体では前年を大きく上回った。ばれいしょ全体では前年をかなり大きく上回り、平年をかなりの程度下回った。</p>
	たまねぎ 	<p>兵庫産を中心に、佐賀産、大阪産も主体となり、北海道産や長崎産の残量入荷もあった。各産地とも大玉傾向で2Lサイズ中心の作柄となり、兵庫産と大阪産は月間の入荷量が前年を大幅に上回った。長崎産は上旬で切り上がり、佐賀産も作の終盤で旬を追うごとに減少したが、全体の入荷量は多く、前年を大幅に上回り、平年をやや上回った。</p> <p>入荷量が多く安定していたことから、安い価格での特売も組まれたため、極端な高値だった前年の3分の1程度の価格であり、平年も大幅に下回った。</p>

(執筆者：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

(4) 首都圏の需要を中心とした7月の見直し

7月は高原産地や東北、北海道に産地が切り替わるが、4月の低温の影響もなく平年並みの始まりと予想される。6月初めの台風2号の影響による雨は、西南暖地や関東平野の野菜の切り上がりを早めると予想される。品目によっては北の主力産地の出荷が始まる前に品薄となつて、価格が上昇するものもあると予想される。東北産のトマトは作付け減少傾向で、えだまめからねぎへの転作も目立つとの情報もある。九州産地の夏野菜は、輸送の問題により、出荷を大阪市場にとどめるなどの変化も見られる。

消費は、ホテルなどの宴会がコロナ前の状況に戻っていないとされ、業務需要が今一步といったところである。

供給過剰になることはないと予想され、市場価格は平年より高めの価格で推移すると予想される。



根菜類

だいこんは、北海道産（しべちや標茶）は7月15日から出荷が始まるが、例年並みかやや早めの展開を予想している。作付けはほぼ前年と同程度である。同産（ようてい）は6月末頃からの出荷となるが、例年並みの始まりである。現状までは天候に恵まれ順調で、ピークは7～9月と続く見込みである。サイズはL中心の2Lで例年と同様である。

にんじんは、北海道産（新函館）は例年と同じ6月20日頃から始まり、7月の初め頃のピークと予想される。約1カ月間の販売で、現状は生育順調であり、作付けは前年並みである。同産（美幌）は例年と同様に7月20日前後からの出荷と予想している。ピークは8～10月と予想され、全般に順調である。青森産は前年よりやや早い6月22日か23日からの販売と予想される。出荷のピークは7月中旬で、7月いっぱいではほぼ終わると予想される。生育は順調で、作付面積は増えている。

ごぼうは、群馬産の夏ごぼうが7～8月を中心に10キログラム段ボール箱で出荷される。現状、生育順調で肥大も悪くなく、L・M・S

サイズがほぼ同割合である。



葉茎菜類

キャベツは、群馬産はやや早めの6月10日過ぎからと予想している。天候は適度な降雨と晴天が続いており、出荷量も大きさも例年並みと予想している。7月は増えながら推移し、盆明けから9月が最大のピークと予想される。岩手産は例年並みに6月25日から始まると予想されるが、4～5月上旬に降霜被害を受けた圃場があり、全体の出荷がそろおうのがやや遅れると予想している。平年並みになるのは、7月上旬の後半からと予想され、7月下旬から8～9月にピークが続く見込みである。作付けは前年並みで、すべて春系キャベツである。

はくさいは、長野産（木曾）は開田高原からの出荷となるが、例年通り6月19日の週から始まると予想される。作付けは生産者の高齢化により例年の90%と減っている。7月上旬にピークを迎え、その後は9月中旬まで横ばいで推移すると予想される。同産（佐久）は7月下旬にピークを迎え、徐々に少なくなりながら8月下旬までと予想される。

ほうれんそうは、岩手産は天候に恵まれ、生育は順調である。播種作業も順調に行われ、7月は6月より増えると予想される。8月は想定より気温が高くなれば出荷のペースはダウンするであろう。7月の出荷は前年並みと予想している。栃木産の圃場は日光市、那須町、塩谷町、那須塩原市の高原地帯にある。現在は800メートル地帯からの出荷が中心であるが、これから7月は1200メートル地帯へと移動する。4月までの低温の影響により、現状の生育は3～7日程度の遅れとなっている。当面の出荷のピークは7月で、8月に入り減ってくると予想され、作付けは前年並みである。群馬産の雨よけ物は6月中旬から始まり、20日過ぎから増えて量的にまとまってくると予想される。6月の出荷は低温の影響によりやや遅れが見られ少なめであるが、播種作業は順調で7月には例年並みの出荷と予想される。

ねぎは、茨城産は6月下旬から夏ねぎとなり、7月20日を目途に出荷は一旦落ち着き減って

くと予想される。数量は例年並みと予想している。青森産の出荷は例年並みに7月中旬から始まるが、ピークは9～10月と予想される。作付けは前年並みで生育は順調である。

レタスは、長野産は6月15日頃に出荷のピークになると予想している。4月下旬から5月初めの低温により6月いっぱいの出荷はやや少なめと予想している。現状の生育は順調で、7月は安定して前年並みの出荷を予想している。群馬産は低温の影響により現状は巻きが緩い物もあるが、量的には例年並みの出荷となっている。やや雨が多いが生育に特別問題はなく、7月も平年並みを予想している。

果菜類



きゅうりは、福島産は7月下旬に出荷のピークと予想される。露地物は早い生産者は6月末頃からの出荷となるが、ピークは8月の盆前頃となると予想される。目立った気象災害もなく生育は順調で、作付けは前年並みである。

なすは、群馬産が本格的に出そろうのはほぼ平年並みの6月下旬と予想される。7月に入ってピークとなり、8月も引き続き多く入荷すると予想される。作付けは前年並みである。栃木産の露地物は7月に入ってから本格的に始まると予想され、生育は順調で盆前にピークを迎えると予想される。ハウスの促成物は6～7月に減り、半促成物は6～7月がピークと予想される。作付けは前年並みである。

トマトは、福島産は例年並みに7月10日過ぎから始まると予想される。現状まで降雨が少なく、やや干ばつ気味である。定植作業は続いており、当面の出荷のピークは盆前頃を予想している。中心品種は桃太郎系である。群馬産の夏秋トマトは、7月に量はそれほど多くはないが出荷が始まり、本格的には8月に入ってからで、9月がピークと予想される。作付けは増えており、中心品種は「りんか」である。北海道産は出荷が始まっているが、気温の低い時期がありやや遅れ気味である。7～8月がピークで、桃太郎系はL・Mサイズが中心と予想している。作付けは前年並みである。青森産は県南の産地であり、生育は順調で5月中旬から出荷は始ま

っている。品種は「桃太郎」と「りんか」が半々で、面積は前年の96%とやや減少している。ミニトマトは北海道産（留萌）は7月中旬から出荷が始まり、増えながら9月にピークを迎えると予想される。作付けは前年並みである。同産（二木）は6月25日の週から始まるが、例年並みである。作付けは前年より微減で、ピークは盆前後と予想され、現状生育は順調である。

ピーマンは、岩手産の現状はハウス物であり、6月中旬に1回目、7月後半に2回目のピークと予想される。主力の露地物は6月初めからとなり、ピークは7月後半～8月中旬と予想され、作付けは前年並みである。福島産の露地物は7月10日過ぎから始まると予想される。県の主産地全体では微増である。茨城産の春ピーマンは7月上旬まで通常のペースで出荷が続き、中旬から秋物の定植のために切り上がってくると予想される。温室物は6月いっぱい切り上がる。作型に大きな変動なく、7月は前年並みの出荷が予想される。



土物類

さといもは、鹿児島産は6月初めの台風の被害はなく順調である。6月にピークとなり、7月には徐々に減りながら推移し、7月いっばいで切り上がると予想される。サイズもL・M中心で、出荷量も前年並みと予想される。

ばれいしょは、静岡産（とびあ浜松）の「男爵」の出荷は5月に始まり、本格的な出荷時期は6～7月である。本年産はLサイズ中心のMサイズと、昨年よりやや小ぶりの仕上がりであるが、平年作である。同産（三島函南）の「メイクイン」は6月下旬には生産者がそろい、7月中旬がピークと予想される。生育は順調で前倒し気味であり、豊作と予想している。肥大も問題なく、Lサイズ中心である。千葉産の「メイクイン」は6月20日過ぎ頃からとなり、生育は順調である。出荷のピークは7月上旬で、8月上旬には切り上がると予想され、作付面積は前年並みである。

たまねぎは、佐賀産は6月に入り収穫が90%程度終わっている。出荷は6月に入って若干減る見込みである。7月の出荷は貯蔵物で、

Lサイズ中心の出荷と予想され、平年作である。兵庫産は6月に入った時点では降雨の影響もあり、主要な品種の収穫が進んでいない。台風が去った後、6月5日頃から収穫のピークに入ると予想される。大玉傾向であった前年より生産量は下回ると予想している。7月は貯蔵物となり、Lサイズ中心に前年並みの出荷を予想しており、9月いっぱいの見込みである。



その他

ブロッコリーは、北海道産めまもべつ(女満別)は6月20日から選別を始め、東京市場へのお荷は6月末からのほぼ平年並みである。ピークは7月10日前後で、8月には減ってくると予想される。作付けは前年の70%と減っており、豆類・麦・ばれいしょ・ビートに替わっている。同産(木野)の作付けは前年の160ヘクタールから140ヘクタールに減っている。6月上旬後半から急増し、7月上旬が最大のピークと予想している。生育は順調で、例年よりやや早めである。長野産は6月12日の週の後半から始まり、7月初めにピークが来て8月には減りながら推移し、9月には再び増えると予想される。作付けは前年並みである。

セロリは、長野産の6月はハウス物となるが、下旬後半から露地物も始まり、7月は露地物が中心になると予想される。生育は順調で、ほぼ例年並みの出荷で、9月までピークが続くと予想される。

アスパラガスは、佐賀産は6月に始まり、7月いっぱいピークが続くと予想される。8月には少なくなるが、10月まで出荷は続く。昨年よりも1週間遅れているが、株の充実は問題なく、出荷量は前年並みを予想している。

かぼちゃは、栃木産の出荷は6月25日頃を予想している。生育は順調で出荷のピークは7月中下旬、中心品種は「ほっこりえびす」「ほっこり133」「ET」である。茨城産の出荷はほぼ平年と同じ5月17日から始まり、作付けは前年の90%程度と減っている。ピークは6月中下旬で7月いっぱいまでと予想される。品種は「栗将軍」で、5玉サイズ中心である。

スイートコーンは、群馬産は6月20日過ぎ

からピークで、7月の下旬には少なくなってくると予想され、作付けはほぼ前年並みである。千葉産は6月末頃から始まり、7月10日～15日には数量的にまとまってくると予想される。ピークは7月下旬から8月5日過ぎまでで、盆明け頃に切り上がると予想される。ゴールデンウィーク時期の強風の影響により、初期物は遅れると予想される。

えだまめは、群馬産は6月15日頃から本格的に増えて、7月の海の日頃までピークが続く見込みである。本年産は3～4月の降雨が少なく、樹全体が小さい。作付けは前年並みであるが、トータルの収量は前年を下回ると予想している。山形産は7月中旬から例年並みに始まり、「おつなひめ」の出荷により下旬にピークとなると予想される。「だだちゃ豆」は7月下旬から始まり、ピークは8～9月上旬までと予想され、作付けは前年並みである。

いんげんは、福島産は現状始まっており、7～8月がピークと予想される。中心品種は「ジャンボいんげん」で、その他「いちず」「かもがわ」「スラットワンダー」であり、8月に入り減少してくると予想される。

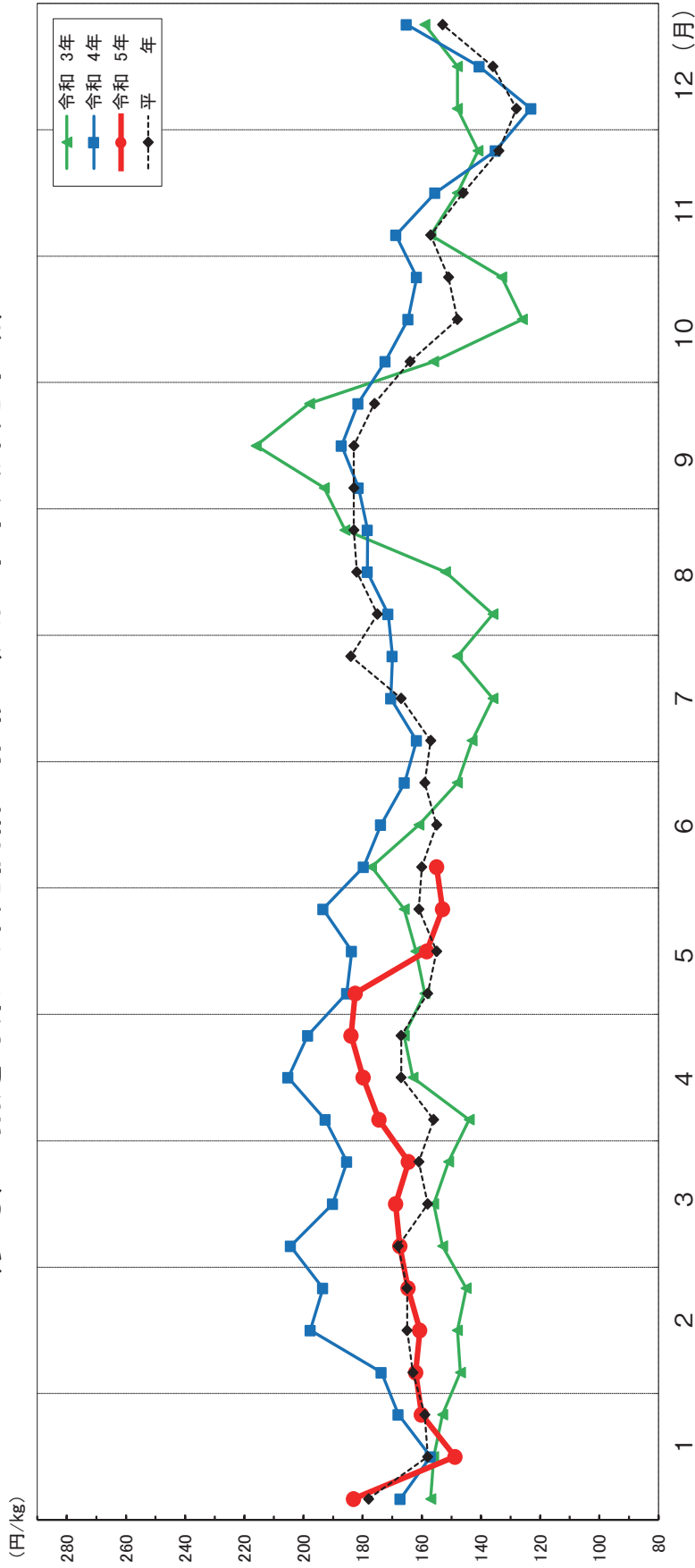
かんしょは、香川産は早くても7月3日か4日から始まると予想される。ピークは中旬で、8月初め頃には減ってくると予想している。適度の降雨もあり生育は順調であり、作付けは前年並みである。

すいかは、長野産は例年と同様に出荷は7月に入ってからであり、現状は生育順調で、お盆に向けて増えながら推移すると予想される。山形産の定植は例年通り4月10日から始まり、交配は5月26、27日に始まった。出荷は7月20日前後からと予想される。ハウス物はその前の15日頃からと予想される。作付けは168ヘクタールの計画であり、新規就農者もいるため例年並みの出荷と予想される。

(執筆者：千葉県立農業大校)

講師 加藤 宏一)

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月																				
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬																			
令和3年	157	156	153	147	148	145	153	156	151	144	163	166	177	161	148	143	136	148	136	152	186	193	216	198	156	126	133	157	148	141	148	148	159										
令和4年	167	157	168	174	198	193	204	190	185	193	205	199	185	184	193	180	174	166	162	170	170	171	178	178	181	187	182	172	165	162	169	156	135	123	141	165							
令和5年	183	149	160	162	161	165	167	169	165	174	180	184	182	158	153	155																											
平年	178	158	159	163	165	165	168	158	161	156	167	167	158	155	161	160	155	159	157	167	184	175	182	183	183	176	164	148	151	157	146	134	128	136	153								

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（平成30年～令和4年）の旬別価格の平均値である。

注2：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。